

2022年11月5日読書会用

第313回山口西田読書会(2022年10月22日開催分)プロトコル

佐野之人記

今回はエクスクルス(番外編)として「独我論からの脱却」の第三回(斜体字は佐野の付加)。

『倫理学草案第二』と『善の研究』における道德論と宗教論の比較を行う際の着眼点は以下の4点である。

1. 「宗教的要求」の出处

① 「吾人」:この「吾人」を「知意」に限定した「個人的意識」とするか、それとも知意の根柢としての「自己」とするか。人は真摯に生きれば必ず「自己の解決」を求めようになるから「宗教」を要求するようになる。この要求の出处の根源は知意の根源であるが、同時に人間はこの要求を知意においてなさざるを得ない。自分の知識や意思ではどうにもならないから「助けてください」というのも知識と意思に基づいた(自己の安心を求める)要求である。

② 「宗教的要求は自己に対する要求」「自己の生命に就いての要求」とあり、「大なる生命の要求」「厳粛なる意志の要求」とある。「の」を主格的に解すれば、ここで自己は宗教的要求の源泉としての「大なる生命」「厳粛なる意志」に出会っていることになる。

2. 「見神の事実」の在り方

① 「自己の活動の中に神と相触れ神の活動を感じず」とある(自己の中に直接に神を感じ、神を直観しようとしている)。

② 「我々は意識の根柢に於て自己の意識を破りて働く堂々たる宇宙的精神を実験する」とある。また「最深なる内生(die innnerste Geburt)に由りて神に到る」、「内面的再生に於て直に神を見る」とされている点にも注目(破れた所、翻った所において直に神を見ている)。

3. 「神」の在り方

① 「神は吾人の宗教的要求を充す絶対無限の勢力である」(宗教的要求を起すのは「吾人」であるが、「解決」を与えるのは「神」という立場をとっている)。「物心合一万物一如なる處」に「宇宙の根本」「統一」を見、これを神と呼んでいる。それと同時に「神の創造は時間上の創造にあらず、其創造は永遠である」とあるように、神の創造を認めている。

② 「神とはこの宇宙の根本」、神は「宇宙の外に超越せる造物者」でなく、宇宙も「神の所作物」ではない。宇宙は「神の表現」。西田はここで正統的な「有神論」を退け、「汎神論」の立場をとっている。

4. 「神人合一」の在り方

① 「吾人が浮薄の思想を去り真摯なる本心に帰する時に自己は宇宙の本体に合し無限の歡喜を得る」とある。しかし「有限にして無力なる人間」が如何にして「絶対

無限なる神」と合一するか、を巡って西田の思索は暗礁に乗り上げている。すなわち「元来神性的なる人間」が何故「真の悪」に陥るか、の問いに「神性の悪」をもって答えようとして「原罪」の語を残し、中断している。罪悪が「吾人の精神の完成」であり、「神からいっても神の発現の途である」という思想にたどり着きながら中断したのは何故か。「神人合一」において直接的な「合一」が目指されている。そのことによってかえって神性と人性が、無限と有限、善と悪が乖離し、両者が平行線を辿って合一に到らぬまま途絶したのではないか。

- ② 「元来絶対的に悪というべきものはない、物は総べて其本来に於ては善である」とされる。他方で「基督は罪人をば人間の完成に最も近き者として愛した」、「罪及苦悩を美しき神聖なる者となした」とあり、さらに「勿論罪人は悔い改められねばならぬ。併しこれ（悔い改め：引用者）彼が為したところのもの（罪：引用者）を完成する」とある。ここにおける「神人合一」はどのように考えられるであろうか。一切の「罪悪及苦悩」は「悔い改め」の時に於いて「最も美」にして「善」にして「神聖」なものとなるということである。ここでは「神人合一」は「罪悪及苦悩」が「罪悪及苦悩」のままに最も美にして善にして神聖なるものに変ずることが言われている。すべてが善であるというのも、こうした「悔い改め」において言われた体験の言葉であろう。この「悔い改め」こそが「自己の変換」「生命の革新」（223頁）に他ならない。そうしてこの「悔い改め」において神の働きが体験されたのだと考えられる。その働きが「実在は矛盾衝突に由りて発展する」と言われているものである。すなわち「神はその最深なる統一を現わすには先ず大いに分裂せねばならぬ。人間は一方より見れば直に神の自覚である。基督教の伝説をかりて云えば、アダムの墮落があつてこそ基督の救があり、従つて無限なる神の愛が明となつたのである」（254頁）とあるように、神は自らの愛を明らかにするために、つねに神自らが「大いに分裂」している（神の自己否定）ということが、自らの「悔い改め」において体験されたのであろう。『善の研究』における「神人合一」は自己の転換と神の自己否定によって成立しており、逆接を含んだ合一となっていると言える。しかしながら『善の研究』第四編の悪の問題に関する叙述は、すでに救われた所に立ってなされた叙述であつて、『倫理学草案第二』におけるような深刻さを欠いている。「序」に「この編は余が病中の作で不完全の処も多い」と述べているように、とりわけ悪の問題に関する箇所は緊張感に欠ける。一つには病中ということもあろうが、一つには自らが「純粹経験の立場」に立ち得たという確信が悪の問題を過去のもの、解決済みの前段階的なものにしてしまったのではないか。

レポート課題

「『倫理学草案第二』においてどこが「独我論」なのか、また『善の研究』において「独我論」はどのように脱せられているか」

佐野の考え（斜体字）にとらわれずに自由にレポートしてください。11月末締切